









りし詞。此巻の初。六帖「秋宵の〜」を烟と見〜ちどふ山の木は春  
あよい〜るうめ。中務集「浦邊〜まはる枝の影ともやく燈の方のけ  
ぢり」をぞえ。

おなごは時の女郎花合ふ。 卷原無風

をうらに恋えきたらぬをみまべし〜おなご〜ハ恋〜にえん  
○抄云。僻按抄云。一説より。むごとふえんと〜回んなり云々。折〜の〜に  
己よえきたらぬ。回〜く〜恋〜ふ〜て〜あ〜れて〜い〜き〜えん〜と〜あ〜る  
べ〜と〜あり。け〜後〜の〜め〜く〜な〜ん〜の。 又考ふる。よ〜恋〜く〜に〜と〜云〜詞〜の〜例  
を。今思ひ得ざれども。万葉のよ〜恋〜く〜ら〜喜〜日〜好〜里〜の〜梅〜の〜影〜と〜あ〜ひ〜と  
とんとわが思を〜く〜に〜と〜ありて。花ふと〜と〜き〜ま〜あ〜く〜〜と〜あり〜ふ  
詞ふきなり。巻末ふ〜ま〜ひ〜け〜恋〜う〜か〜や〜せる〜な〜ぞ〜〜と〜が〜は〜あ〜乃〜と

とけん思な〜く〜に〜と〜い〜ふ〜も〜同〜と。鈴屋夫人のまを。又回巻ハハ  
風〜と〜名〜を〜あ〜る〜と〜も〜み〜ふ〜あ〜る〜ぬ〜ま〜ぎ〜ん〜乃〜梅〜を〜あ〜ひ〜ら〜す〜す〜ぬ〜と  
あ〜る〜を〜あ〜ふ〜あ〜ふ〜と〜い〜ふ〜ま〜な〜り〜と。千法箱もいそれ〜。又上部  
おも。我君の垣の小柱〜な〜ぞ〜〜と〜恋〜ふ〜さ〜う〜なん〜よ〜と〜人〜は〜〜と〜えん。  
と〜あ〜る〜も。花ふ〜さ〜く〜と〜い〜ふ〜ま〜あ〜く〜〜と〜恋〜あ〜る〜を〜い〜〜と〜す〜ゆ〜す。上  
おもい〜る〜が〜め〜し。か〜ま〜バ。今の恋〜に〜と〜ある〜も。大〜く〜い〜ふ〜る〜詞  
なれど。あ〜く〜〜と〜あ〜る〜や〜あ〜ふ〜と〜ま〜な〜る〜。然〜ま〜バ。一昔〜た〜ま〜を。  
女〜と〜い〜ふ〜名〜の〜花〜を〜あ〜ひ〜つ〜ま〜バ。あ〜る〜と〜その〜ま〜に。〜と〜ま〜や〜我〜あ〜ふ  
なる〜ま〜ま〜ま〜ら〜り。と〜ま〜も〜か〜く〜名〜の〜ま〜ら〜り。人〜の〜い〜ひ〜思〜せん。こと  
あ〜る〜を〜も〜あ〜く〜ま〜ら〜ち〜出〜して。ま〜あ〜く〜〜と〜愛〜せん。と〜い〜ふ〜あ〜る〜の。  
但〜〜と〜あ〜る〜ま〜向。六帖の。花のま〜ら〜り。と〜あり。 瓶麻呂云。六帖

なほふちこがはひ一首おきき。 女郎花を折るゆふふぶがふり奈  
そいざあをまきせんよりいあのおやう小回しをなすはも  
あふてえんとおえー花にといやうまきまきあてももぬ  
まけてえんとあてふは花をどうとある洞帯回意なるは  
いんは役やおんころん程よく考ふべきなり。

あの人あつ涙

秋の野の露はかろくをみまべーはふ人なぬまはくや姉ふ  
○露小被結る女郎花のまげふえゆるをえてさても拂ふ人のたさ  
小ぬきくこの日敷をふまやといゆるなまへー。 露よれ  
かろく。 風よふろくくと。 露のらまうせおくやうおまきい  
なまへー。 下小いづつ小あふおろく花うとてふ中らぬ人

やをうせん。

女郎花も乃んの何ぞあまおたりのもあひまうりけき  
○花の心のあなるゆきあまきたあまぬとりまうりなく。 何と  
も。 毎年秋は遇ひつむるゆよとありあぶくーまき女の早く人は飽う  
まやうよいへるなり。 花の心のあぶかりと。 古今秋「女郎花を折る  
野風ふうちあひまんと門をよれふまうん。 同俳「秋の野ふな  
あめきく。 女郎花あまかーが方ー花も一時なまの候ういへる  
なり。

母の被ふてさやと侍るう。 せんていの侍ををまへてける。 侍  
之とごとふ。

つうの結云。 そののふ  
くゆて。 さとよ侍け  
るま。 何より侍あ結  
へま。 侍あまに  
せんていとま。 侍  
い。 なり。

近侍更衣

五月雨りぬきふし社よいとくく落おきさる杖のさびしき  
○近江更衣五月小母子別あゝなをんし母服一年暇五十日令おま  
ま程のす小やと抄よいへる物えし母子別侍し五月の比より  
むる方もあき袖は杖の末ていよく以て落おきそひ濡さるるす杖  
さびしき物なり

清色し

延喜御製

大いも杖をわびしき時まきぞ落けのしん袖をぞあま  
○一首は清色物なり於上下の清色物なりまきあまの詞を  
加て兄まきいふくくぬらるなり  
亭子院の清色物なりいふくくぬらるぬらるのあまをまきてえ  
せき勢あひて

白鳥のかさる毛何のきしかかんあうその後もやう記その説

法皇御製

世々伊勢集

清色し

いせ

うきくく君がし先ゆふ花なまき玉とらんてやそ後もおくは藤  
○此序繪巻のこと考あうて別記ふくけくいへるうらそくにま  
まぶなり

大補が後藤殿小侍さる小友つがうり女御をさるてはうそ  
けふ

○後涼殿ハコウロウデシとよむ又ゴリヤウデシとも云とえ  
えて東山左府名目鈔おも二つふ小訓をつけられり然も  
どもまげハコウロウデシとよぶ方小やと思さるる源氏





あつたりある言城の縁をいへるなり。

かへ

伊勢

んなき身も草葉にもあつたりかたむら小枝も風もかたむらかたむらかたむらは  
○初句はま抄は身いんなき草葉にもあつたりと足る。草本  
を此情なまなりと有り。此後のみならずんはんなきといふ事。  
草葉にもへり。んなき草葉の類なるは身もあつたりと  
云々とする事なれどもさてんなきとあり。用なれ詞となり。んな  
き身い草葉にもへり。詞の清きも。んなき身い。とあり。か  
たむらまゝ。んなき身いといふ事。末句の類も。んなき身い。か  
け合てんなき身いといふ事。類も。まゆゑいんなきと云ふ。あも  
りてすゆるなり。能ま。初二句の甚用ある詞なり。 瓶麻呂云。初句。

んなき身も草葉にもあつたりかたむら小枝も風もかたむらかたむらかたむらは  
のまい。んなきもあつたりかたむら他んなきをいふなり。一首  
く。林の本葉のうらうらみ。めま。んなき。偏もなき事なるを。  
いりて林も風も類も。らんと云ふなり。されど。んなきと云  
詞をかくぎりに考へる例も。今ふ。い。思ひ出さといへ。げ。例を  
いま。思ひぬされども。決て此後のみなるべく思ふ。 此句。  
下。小毛又出たり。草葉も。い。詞も。は。な。く。て。い。ひ。つ。つ。と。い  
い。云の葉も。い。ひ。つ。つ。林風も。ま。ま。ま。ま。区。い。んなき。身も。草葉。にも  
あつたり。小枝も。風も。類も。らんとあり。  
男も。ま。ま。つ。つ。け。い。なり。

よゝ人あつたり



梅子出るとおなれば、君もは房の如く時をきぬよきなり。我も梅子出  
るもおなれば、とりかきをかきとるものこそなり。又只  
ふ、こが身ハをうしき意のかゝる人、おなきもな色バ、梅子あゝそ  
も、世の人はとやかくいそ、手もな。昔よりおろ、いそ  
おるをつめて、さほむかりぞ、なごり、いふもあゝん、うとも思  
ど、いふあゝん。

かゝる

い勢

君もせふゑな、いほぞ我もえるまねくをな、あふ人やと、戸親と  
○おれよりやりたる、房を、あゝの、いふに、とりな、いひおこせ  
る、ゆゑ、おれよ、こゝろ、いふ、いふ、我も、さる、ん、ま、を、いふ、ぞ、我  
も、人、よ、あゝ、され、る、月、あゝ、今、も、誰、と、い、ま、る、人、よ、お、き、ゆ、ゑ、い、房

の梅子出ると、あゝ、う、む、と、う、人の、も、や、せん、と、て、せ、て、も、の  
こと、お、君、も、枝、ま、ま、で、は、房、を、バ、梅、て、も、又、梅、う、ゑ、ま、ま、梅、て、又  
い、る、ぞ、と、なり。二、句、つ、の、詞、を、梅、る、上、へ、ま、ま、梅、る、ゆ、い、なり。  
け、つ、と、あゝ、あゝ、を、梅、し。

歌一ら文

よゝ人不知

梅の枝、枝、つ、づ、ふ、の、お、ま、あ、う、い、房、を、我、身、は、う、人、あ、ぞ、も、い、け、ま  
○抄云、何、お、ま、い、ま、も、お、く、也、我、を、起、め、我、身、を、梅、よ、た、と、て、よ、め、り。  
又、意、の、奇、也、也、を、う、を、お、く、め、ま、ん、な、り、と、い、ふ、に、い、げ、ま、意、の、う、へ、ま、  
一人、お、ま、い、ま、を、い、づ、づ、ふ、あ、う、い、と、い、ふ、抄、の、後、の、後、の、如、く、意  
の、奇、な、り、ん、り。又、只、あ、ま、次、の、奇、也、も、世、中、の、を、か、な、り、を、思、へ  
よ、ま、ま、も、あ、ゆ、れ、ば、い、ま、も、さ、る、ま、あ、い、づ、づ、ふ、ら、く、も、お、思、ひ、よ



素子也。秋の比。兵庫子。露なぐぬき。一。松をあきまき。源うらぬ  
よをさくやさむ。多人の木きありす。んとあり。かゝるも。意のこ  
と。せゆ。なり。

秋のころかひ。ある。雨。女ども。枝。あま。すの。うち。小。侍。々。小。男  
の。奇。也。や。を。ひ。入。て。侍。々。れ。ど。す。急。い。う。ち。より。

○すの。うち。よ。い。簾。の中。に。なり。 奇の。を。や。を。ひ。入。と。い。い。白。露  
の。ま。く。と。云。ふ。句。を。入。と。る。なり。き。て。簾。中。なる。女。の。花。の。ま  
を。ま。く。と。下。句。を。ば。つ。け。る。連。歌。なり。伊。勢。相。伝。 上十。下。昔。男  
九。段。  
あり。け。り。其。男。伊。勢。國。は。かり。の。使。よ。い。き。々。に。ま。く。ね。や。う  
や。う。何。け。あ。ん。と。す。る。ほ。ど。小。女。が。さ。う。う。い。ふ。さ。う。づ。き。れ  
さ。ら。に。あ。を。か。ま。き。出。し。う。う。と。う。て。見。ま。が。か。ち。人。の。ま。く。と。

どぬまぬまふーあまが。と。ま。て。す。急。な。り。せ。き。う。づ。き。れ。さ  
ら。ふ。つ。い。松。の。す。ま。し。て。奇。也。末。を。か。き。つ。く。あ。ま。坂。の。雲  
ま。く。え。なん。と。て。ま。く。と。ある。な。ど。の。歌。なり。 拾。遺。集。雜。質。な。ど  
も。比。歌。の。連。奇  
ま。く。と。か。く。さ。ら。に。奇。の。本。末。を。つ。ぎ。て。よ。ま。る。の。ハ。書。紀。の。景  
行。の。序。卷。小。歴。常。陸。至。甲。斐。國。居。于。酒。折。宮。時。舉。燭。而。進。食。是。夜  
以。歌。之。向。侍。者。曰。珥。比。廢。利。菟。玖。波。鳩。須。擬。氏。異。玖。用。加。祿。菟。流  
諸。侍。者。不。能。答。言。時。有。秉。燭。者。續。王。歌。之。末。而。歌。曰。伽。餓。奈。倍。氏。  
用。珥。波。虛。く。能。用。比。珥。波。苦。鳩。伽。鳩。昂。美。秉。燭。人。之。聰。而。教。賞。と  
あり。これ。お。小。女。さ。ら。に。は。ど。免。なり。

よ。も。人。あ。ら。ま

白露のむく小あまが。と。ま。て。す。急。な。り。せ。き。う。づ。き。れ。さ  
ら。ふ。つ。い。松。の。す。ま。し。て。奇。也。末。を。か。き。つ。く。あ。ま。坂。の。雲  
ま。く。え。なん。と。て。ま。く。と。ある。な。ど。の。歌。なり。 拾。遺。集。雜。質。な。ど  
も。比。歌。の。連。奇  
ま。く。と。か。く。さ。ら。に。奇。の。本。末。を。つ。ぎ。て。よ。ま。る。の。ハ。書。紀。の。景  
行。の。序。卷。小。歴。常。陸。至。甲。斐。國。居。于。酒。折。宮。時。舉。燭。而。進。食。是。夜  
以。歌。之。向。侍。者。曰。珥。比。廢。利。菟。玖。波。鳩。須。擬。氏。異。玖。用。加。祿。菟。流  
諸。侍。者。不。能。答。言。時。有。秉。燭。者。續。王。歌。之。末。而。歌。曰。伽。餓。奈。倍。氏。  
用。珥。波。虛。く。能。用。比。珥。波。苦。鳩。伽。鳩。昂。美。秉。燭。人。之。聰。而。教。賞。と  
あり。これ。お。小。女。さ。ら。に。は。ど。免。なり。



を思ひやりたる趣をなり。拾遺秋 嵯峨野小前哉ありにまうりて。后  
系長能同くうーに足まどもあぬ女あふ世へよやくよひる多び孫  
まねまう。

秋乃田

よき人ーら更

秋乃田の宿天かきちの庵の母ほりまでさける秋乃秋足まどあぬ如か  
○此奇万葉十に出て「秋田くるかりかやどり母あふまでまことあ  
る。似庵のあふりまで映テリあふほどふ。色イロの美しく嘆く秋乃秋とらあ  
なり。此秋の母かひき香をうふはあふび。衣イロ靴をうふなり。

秋の秋をまどらまげのこつす月も星ちとどにもたのまざりなり  
○まどらむとハ月時とらむせ。睡ネツケ氣のまかたをうふなり。意の心乃  
切なるゆゑ。秋の長き秋を祓おけもなく。秋の身も。まふまふ

るをうにもたのまげ。長き秋を毎秋うなげきめをうふなり。意  
の奇なるうハ編なり。

秋の息をうふ。人よつらますと。

まどらむりくなば人より足勢も何へぞぬあをうをせれ。秋乃秋  
○此秋の息も。秋の時多のまらくあつね。君ふ足せもあへび。秋  
ぬべし。さやうよいつづら小秋果んきをうふ。このくも秋をうせは  
おらするぞとら。まぐれを。後世よ。秋のまらう。冬乃秋のまの  
とすれど。和名抄中も。霖雨小雨也。之文 礼とまら。さのま定まらるにま  
誰が。万葉十よ。まを麻のうあひ。秋乃秋のう。ぐれのう。にらら。満  
くをうも。又「朝露は深きあふる。秋乃秋ま。まぐれをう。ありま。  
子ぐの。又古今歌列「まら。人のうをう。ぬ。秋乃秋のう。ぐれと。月

ぞうりにくる。なごも何事。

秋の奇と云。

つゆき

ゆきより降りをりてかぎん朝おく麻ふらあき飛べ乃秋を貴

○今を盛小咲くる秋の葉を。毎朝く麻が踏たうせぎ惜き物なるを。

我を性も還ほも。おろかぎん麻のふもきくまにしくおく

ま。いりふもつこく。おられまとなり。麻ふらなるはとりふ。惜む

をあり。さそかぎんとりふかけ合せなるなり。

むゆれの朝臣

我君の庭に秋を登りりぬるりおろ人やとやしと云ん

○一首おきゆらなり。おくまて見まばおれよと云きを。あつん

なり。元真集より我君の橋を風ふらとてぬあす人やとやしと

おもまん

おん人しらだ

白き路のおうきき。秋を我を記をらそはさし。我やかぎん

○秋の葉は路のねまげよおけき。おまぬべく見ゆるを。後よりこのせ

おとせんまをけけま。我こそ多おてかぎ。免とぬり。倍まよいそ

が折ルクラ井ナラバ。オレが折ルと云ふを。一首よ。秋より

をりてかぎんまこと。ゆるるまゆて。おうききを。まと秋やこのさ

さんとかけ合へるなり。又上句。白き路のま。おうきくといまん料の

みふて。おうきくま。たふおれんまを。きまなまをとりつこなるを

と。りふ後もありて。は後もあり。は奇をもと。万葉集

十に出で。下句。おろりおろり。おきまかさんとおまばなり。乃







そのほのしやまき、重紙何なり。うひまなびふ。うさひこととをふ體用あり  
 て、かり年のいよとあるま。つづぐうふこととゆうさぬまるものぞと。  
 偏ひいそれるま。只ひあやまらきしなり。體のことばをうさぬ子  
 例ま。まむ子むまひさひのくほひのくほ川。秋より秋より一なる何  
 くと百人一肩峯のかけ橋とん。り。就まき。假庵かりの庵かとふゆへし。  
 廬をいおとよむり。和名抄云。毛待云。農人作廬以便田事。和名 伊保  
 えり。

よも人あしす

我袖より落をねくたふま。天何ま。たまうらみま。やとすうん  
 ○さふ川よまぐしをうけて。せまともむる。事あるに。よりそ。て上  
 の川なれど。雲はまぐしとといひ。よせらるなり。古今報上。我よふ落を

ねくたふ天川とまぐる。舟のこのい。づくの。まぐらとま。川をせ  
 き。岩の崩るるをともむ。とも。柴竹など。ねまかると。付るを云と。古  
 今集打碁よめるがめ。今の俗ゆも。ミガラとゆななり。

秋萩の枝もとをねになり。ゆへは。ちうつ。かましく。おけ。ななり。なり  
 ○とをま。枝の。し。し。し。重まき。ま。なり。萩の枝の。ゆ。と。た。ら。ま。お  
 ち。れ。ま。か。る。い。ち。れ。の。ま。さ。る。上。へ。ま。又。お。ま。ま。け。く。と。重。く。お。く。ゆ。を  
 なるよな。と。つ。な。う。万。葉。十。秋。萩。の。枝。も。と。を。ふ。落。を。お。ま。ま。ま。ま。も  
 時。ま。な。り。ふ。た。る。か。も。又。ま。ま。り。折。の。と。を。又。古。今。上。を。う。て。ら。ん。お  
 ち。ぞ。し。ぬ。き。秋。萩。の。枝。も。た。ま。し。お。お。ま。る。ふ。落。と。ある。た。ら。ま。枝  
 の。た。め。く。と。す。か。こ。ち。は。て。と。を。と。ま。よ。いと。を。ま。き。何。なり。  
 我落のをまがう人のし。ら。ま。落。を。け。へ。て。ま。お。ぬ。く。もの。あ。も。ら

○ほろハ万葉花ハ出たり。 ナサズレテ けりても不冷消雨なり。 そのほも

がき物ゆもつれまて消さばし玉子豊く物ゆも何さうしと歌なり  
なり花三 万葉 小伊勢の海のおきつら白浪花は欲得つみてりも  
あづとふせんなど形多くあり。 末句の如文字濁るべ  
一 万葉は毛我とまり。

延喜御時うら矢一けれぞ。 豊く

さを麻のまなうけをの秋そ秋了かたるまらぬ我もけぬし

○急舟なるべしは向までハ序もて白浪のぬくとつれさなり。 急の思  
ひの若しは消ぬべく思もると形なり。 万葉は急の歌ハ入  
て。 詞を麻のはるにしづむ秋そ秋よかたる白浪我もけぬしと有。  
又万葉集は上句つれさる麻の志づむとも。 詞を麻のなみ  
志づむともありて。 皆急舟中なり。

秋の野乃草を糸とも思はなふおくしらぬを玉とぬらうん

○草の冬ハ 昔使はま。 詞の 舞の はなり。 草葉にきあふべ。 此例の  
上ハ向の問ハいりぞとりやを加てらぬべし。 上句の秋のよの  
か。 い。 の。 ま。 け。 舞力ありては舞  
みてあまばなり。

文屋朝康

白浪小風のよましし林の野をつらぬきとえぬ玉をらさけふ

○草の冬ハ 昔使はま。 詞の 舞の はなり。 草葉にきあふべ。 此例の  
上ハ向の問ハいりぞとりやを加てらぬべし。 上句の秋のよの  
か。 い。 の。 ま。 け。 舞力ありては舞  
みてあまばなり。

なみね

秋の野の森のしらを後集又二ふかく白を身をけき足もぢ玉やしけるやおどろかきけり

○けりあえき草葉のよよおきわくしるる身をいへるを偏をけり  
三句子けりんをばとりひて。末句おどろうれつと何る由て。秋乃  
間はおきくしるる。後の朝日の出る程おきくくとか。やまて。実  
小玉をしきくしるるやうに足ゆるさか。足るやうなり。百葉巻十。秋  
不おたる。白を新おく玉もぞ足ゆるおたる。ちるる。

歌しらず

よみ人不知

たくしるるあらしを白を不なるもの城ちるる落との人のしるる  
○おくとそのあふを草くこのしるるなるものをいので人しるる  
落とのしるるしるるなり。子草おをいへる草くこのをいへる

ゆををりなり。金糸秋。白を落と人しるるしるる。足もぢ玉おくと  
ごとふをぞうはまる。ぬ三句のを文字小例のわありて。いのでと  
りしるるをふくきり。

白玉乃秋の本おあよやどれふと足ゆるを落のをかすなりなり  
○さかるとあふ秋むくなり。一首おをかくしるる所なり。ふ玉のけのき  
いをゆる用次

秋の野おくと白を落乃きえきく玉をりぬまきもかかて足すを  
○後の玉を費ても。消さるおあふ。おふ費てうけて足すをとり  
なり。うけてハ。願又ハ衣なごふりしるるなり。右玉を以て身の飾  
といたるなり。いひくよえしるる。

かき衣袖くのみまぞおくと落を我身を秋の野とやえしるる

○つりまをい腐るほどふなり。抄。我身を杖の杖と腐が足ておく  
 のとまりと何るい。空の暮とえたるなれど。今思ふよ。こそ杖の  
 あまれは感じて。流す涙の袖も朽ぬべきを多きをいふなり。  
 一次の奇も同ト。

大なりまの袖むと何あはれくふこのわうくも後やこまておつらん  
 ○大なりま。世中にいもんぐぬし。そを流るるやうおんものおきバ。  
 おちぞうにいとくさなり。一首おきこい。天地の宵ふ。我袖のこ一つ  
 あつとつよもてもぬきふ。いかなきぞ我袖のこ。とりのたてかく  
 痛のおくもぞとつをさなう。二三句。我袖一つ。まはあ  
 なくふとつよなうんとい思ふれど。あつとつ。種をまきたるも  
 のなり。代あもあつとの例あつんや。打考よべきことなり。 下句ハ。

・美本に流のよある方より。一す也。上句よりいひ下したる詞の流  
 つきも。いづれとつあつを加てんゆる。舟の棹も。必やとあへき。所  
 よはあへん。さて例の三句のよ。ふらうで。おきをあくみ。る  
 る。上あもいへるがぬし。

朝どとつりねく流。袖ふけと先てせ乃う。ま時の涙あがわ  
 ○そめううたう。古今。下。こまらう。ま涙のよ。まむらひ。おきて。世の  
 き時の涙あがわ。

杖の奇とてよえり。 つつゆき

秋の野乃。ももマけぬを。ぬえぞのおあふなべ。小流け。のこしん  
 ○二句のを。もどにカありて。いづれとつあつを。あくみ。る。上あ  
 ふとつよ。団ト。一首おきこい。あきけ。捨遣。秋の野の。ももあわ

けぬ我袖の落けくもなかりまゝなるべし

ふこのやめ

いよふて後の志ましくぬぬきまの秋萩 みづくく月影を  
○秋はおる露の白玉小舟のしりしり きりくときるを 磨くとしひ  
なされたるなり。さきさきけしきの歳年を経て後うきまん まろく世  
まろくトとなり。一着の表子を落といなれども、露のうきといはせ  
るなり。されど又風神抄の如くなるは、露のうきにあはき、まろく月の  
ゆくのなるをいふなり。此方も種なるまろく也。

よみ人しり

秋の秋乃月の新こそ本持留より あつたまねとててりたれま ねしれ

○抄よ。本の間の月は葉の影の身ふるるも、落葉衣となり。 一 零羽

衣。保なりとあり。 整神法師ハ下句から葉衣と月けりしり  
ありてハ、心持ごとし。 いあ、菅原万葉子 秋之夜之月之影許曾自木間  
墮者衣 オシバキヌトミエマケレ 見江亘氣禮と云。此よ名よか、せぬるまで心持べしと  
いそれなり。物さバ、本写れ月影もこと小月をたちて白くして、そ  
世を白妙の布なごて見ゆるをなごし。 又此よよ、ふ指も、此葉  
の如く、落葉衣と云。とあきき、他は落葉衣と云。例の例もいす。又  
南うだれども、月影の本間をよりて 下ケラ 斑も月けりつるを、仙人などの  
本葉をあめ綴りて見ゆるさ方の如く、思ひよきと云。よいあう。う。  
本の写よりといひ、身ふるるを、とあるなどよく思ふ。 曾丹集子  
頃ちりし露の嵐ごとく、ま本の葉を衣となむ山人といふ奇  
もあきかなり。 又師のいさく、上件に従ども、一マろくも、

色ど又只あま捨遣集第七の奇よ月のきぬをさそ待々るふ久方の  
月おきぬをばきふれども光きそきぬまの身なりをまといふあ乃  
月のきぬといふことを月おきぬなりなぞいふ説きいひなりこ  
ま調キヌの縮なるを月のまよりなるなりとこぞ致金箱の脱あま  
をさあも菅家万葉よるまは句のたつまばきぬといふあるを聞  
ひて調の縮おきぬといふれり調縮ハ延喜式に記しり  
但し此説をおきぬを衣のうらまはさしを要なけきと云ふ衣といふ  
ことよりいふべしきなり考へ合すべきことなりかくり  
なり

袖よりあまおきぬをたどるとふこよひうはるぬうげと云つ

○月おきぬ毎秋八月の十五夜毎まかきぬ氣と云て我身に表て

かきりけりよと云えし。

秋乃秋の月おきぬを言明て光さやふ見るともいふ

○抄よの曇る秋の奇と見ゆらゆらなりと何とぞ整中法師の鏡  
者などふまらまら人のよなるうといふれりまことふさも  
あま〜ことなるゆゑありげふゆ奇なればなり。

小野義材

あまの池乃月おきぬこぞ毎なれがかつの枝よきをさばたまん

○月の池あふうつら。其池お舟を浮つるを月の上こごと  
ふなり。さく月中の枝お梅やさば〜んとなり。抄よ菅家句  
梅穿波底月船厭水中天お佐日記よ水底お月の上よりこぞあ  
まをさば〜ハ桂な〜といふを引さ〜いよ〜かなん。







天河志ぐり多うけてと先<sup>て</sup>なんあふれうれ、月やよどむ中  
○古今<sup>報上</sup>あふれがも重のまをめてまやれむうりとも先<sup>て</sup>は月ぞ  
ながあ。

秋風<sup>に</sup>なまやふらん天川<sup>に</sup>もる<sup>に</sup>せ<sup>に</sup>めく月乃<sup>に</sup>流る<sup>に</sup>  
○まきつえよれど程下句<sup>に</sup>写保<sup>に</sup>ある<sup>に</sup>や、流る<sup>に</sup>湫<sup>に</sup>めてもわ<sup>に</sup>間  
めてもあ<sup>に</sup>い<sup>に</sup>なる<sup>に</sup>くら<sup>に</sup>は<sup>に</sup>よ<sup>に</sup>む<sup>に</sup>湫<sup>に</sup>など<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>ま<sup>に</sup>か<sup>に</sup>き<sup>に</sup>や<sup>に</sup>  
なり。又<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>よ<sup>に</sup>ま<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>も<sup>に</sup>水<sup>に</sup>は<sup>に</sup>月<sup>に</sup>日<sup>に</sup>など<sup>に</sup>の<sup>に</sup>秋<sup>に</sup>の<sup>に</sup>う<sup>に</sup>り<sup>に</sup>ま<sup>に</sup>き<sup>に</sup>う<sup>に</sup>と<sup>に</sup>か  
うやく中へま<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>う<sup>に</sup>ち<sup>に</sup>が<sup>に</sup>れ<sup>に</sup>相<sup>に</sup>なる<sup>に</sup>よう<sup>に</sup>思<sup>に</sup>ひ<sup>に</sup>よ<sup>に</sup>せ<sup>に</sup>い<sup>に</sup>へ<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>ま<sup>に</sup>  
あ<sup>に</sup>らん<sup>に</sup>。

秋とれおあふんぞみだれつ<sup>に</sup>ま<sup>に</sup>が<sup>に</sup>も<sup>に</sup>み<sup>に</sup>ぢ<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>と<sup>に</sup>ち<sup>に</sup>り<sup>に</sup>まさ<sup>に</sup>り<sup>に</sup>ける<sup>に</sup>  
○秋<sup>に</sup>が<sup>に</sup>ま<sup>に</sup>ま<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>風<sup>に</sup>は<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>糸<sup>に</sup>の<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>る<sup>に</sup>る<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>る<sup>に</sup>が<sup>に</sup>それ<sup>に</sup>より<sup>に</sup>先<sup>に</sup>へ<sup>に</sup>我<sup>に</sup>ら<sup>に</sup>が<sup>に</sup>乱<sup>に</sup>て<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>

まさる<sup>に</sup>る<sup>に</sup>よ<sup>に</sup>と<sup>に</sup>なり<sup>に</sup>。 数<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>る<sup>に</sup>ハ<sup>に</sup>目<sup>に</sup>ふ<sup>に</sup>そ<sup>に</sup>へ<sup>に</sup>て<sup>に</sup>数<sup>に</sup>り<sup>に</sup>り<sup>に</sup>なり<sup>に</sup>。古今<sup>秋上</sup>あ<sup>に</sup>  
ごと<sup>に</sup>小<sup>に</sup>杜<sup>に</sup>ぞ<sup>に</sup>思<sup>に</sup>し<sup>に</sup>き<sup>に</sup>と<sup>に</sup>み<sup>に</sup>ら<sup>に</sup>つ<sup>に</sup>う<sup>に</sup>門<sup>に</sup>ろ<sup>に</sup>ひ<sup>に</sup>ゆ<sup>に</sup>く<sup>に</sup>を<sup>に</sup>か<sup>に</sup>ぎ<sup>に</sup>り<sup>に</sup>と<sup>に</sup>思<sup>に</sup>へ<sup>に</sup>ど<sup>に</sup>。  
二<sup>に</sup>句<sup>に</sup>の<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>も<sup>に</sup>か<sup>に</sup>ろ<sup>に</sup>く<sup>に</sup>流<sup>に</sup>へ<sup>に</sup>る<sup>に</sup>めて<sup>に</sup>数<sup>に</sup>を<sup>に</sup>ハ<sup>に</sup>ん<sup>に</sup>ぞ<sup>に</sup>れ<sup>に</sup>つ<sup>に</sup>え<sup>に</sup>と<sup>に</sup>い<sup>に</sup>ふ<sup>に</sup>  
の<sup>に</sup>も<sup>に</sup>なる<sup>に</sup>る<sup>に</sup>。古今<sup>毒下</sup>あ<sup>に</sup>一<sup>に</sup>先<sup>に</sup>とも<sup>に</sup>と<sup>に</sup>す<sup>に</sup>う<sup>に</sup>な<sup>に</sup>く<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>ま<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>う<sup>に</sup>る<sup>に</sup>る<sup>に</sup>に<sup>に</sup>し<sup>に</sup>  
ま<sup>に</sup>ぬ<sup>に</sup>と<sup>に</sup>思<sup>に</sup>へ<sup>に</sup>ど<sup>に</sup>な<sup>に</sup>ど<sup>に</sup>の<sup>に</sup>秋<sup>に</sup>なり<sup>に</sup>。

涼書文

清<sup>に</sup>う<sup>に</sup>て<sup>に</sup>物<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>ふ<sup>に</sup>杜<sup>に</sup>乃<sup>に</sup>衣<sup>に</sup>と<sup>に</sup>そ<sup>に</sup>湫<sup>に</sup>の<sup>に</sup>川<sup>に</sup> 志<sup>に</sup>も<sup>に</sup>み<sup>に</sup>ぢ<sup>に</sup>なり<sup>に</sup>け<sup>に</sup>ま<sup>に</sup>  
○紅<sup>に</sup>の<sup>に</sup>湫<sup>に</sup>は<sup>に</sup>深<sup>に</sup>く<sup>に</sup>る<sup>に</sup>衣<sup>に</sup>へ<sup>に</sup>程<sup>に</sup>湫<sup>に</sup>の<sup>に</sup>む<sup>に</sup>と<sup>に</sup>その<sup>に</sup>小<sup>に</sup>流<sup>に</sup>る<sup>に</sup>ま<sup>に</sup>が<sup>に</sup>杜<sup>に</sup>を<sup>に</sup>即<sup>に</sup>湫<sup>に</sup>川<sup>に</sup>は<sup>に</sup>数<sup>に</sup>  
流<sup>に</sup>び<sup>に</sup>る<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>糸<sup>に</sup>なる<sup>に</sup>よ<sup>に</sup>と<sup>に</sup>なり<sup>に</sup>。 さて<sup>に</sup>か<sup>に</sup>く<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>れ<sup>に</sup>る<sup>に</sup>う<sup>に</sup>ハ<sup>に</sup>志<sup>に</sup>の<sup>に</sup>弁<sup>に</sup>  
なる<sup>に</sup>べ<sup>に</sup>し<sup>に</sup>。紅<sup>に</sup>の<sup>に</sup>湫<sup>に</sup>は<sup>に</sup>多<sup>に</sup>く<sup>に</sup>ハ<sup>に</sup>志<sup>に</sup>の上<sup>に</sup>あ<sup>に</sup>て<sup>に</sup>う<sup>に</sup>す<sup>に</sup>な<sup>に</sup>れ<sup>に</sup>ば<sup>に</sup>なり<sup>に</sup>。 清<sup>に</sup>う<sup>に</sup>  
そ<sup>に</sup>ハ<sup>に</sup>ん<sup>に</sup>の<sup>に</sup>き<sup>に</sup>え<sup>に</sup>く<sup>に</sup>と<sup>に</sup>なる<sup>に</sup>る<sup>に</sup>を<sup>に</sup>ほ<sup>に</sup>く<sup>に</sup>く<sup>に</sup>なり<sup>に</sup>ぬ<sup>に</sup>れ<sup>に</sup>う<sup>に</sup>へ<sup>に</sup>し<sup>に</sup>

伊勢集  
ぬまの



もあきそ物を事ふつきて、其思ひの加<sup>か</sup>もる事ハ有なり。万葉七<sup>しち</sup>こと  
とれがあげき先づつぐ<sup>つぐ</sup>くも琴の下<sup>した</sup>植<sup>う</sup>けはまやこそゆる。古今  
下<sup>した</sup>。又<sup>また</sup>び人の任<sup>まか</sup>せきあるなるなよあげきくも不<sup>ふ</sup>琴<sup>しん</sup>はるるす。  
なごもあり。かまたすハ<sup>ハ</sup>搔<sup>か</sup>合<sup>あ</sup>鳴<sup>な</sup>なり。古今<sup>古今</sup>。二<sup>二</sup>秋<sup>あき</sup>風<sup>かぜ</sup>かまたす琴<sup>しん</sup>の  
聲<sup>こゑ</sup>よさへもなく人の燕<sup>つば</sup>う<sup>う</sup>う<sup>う</sup>ん<sup>ん</sup>なごもあり。

露をよめる。

菖蒲清正

ぬきとむる秋<sup>あき</sup>なけきぞ白<sup>しろ</sup>を落<sup>お</sup>ちち<sup>ち</sup>き<sup>き</sup>における玉<sup>たま</sup>もかひな<sup>ひ</sup>  
○露<sup>つゆ</sup>ハ玉<sup>たま</sup>とよき見<sup>み</sup>ゆれども。雲<sup>くも</sup>きとたふる秋<sup>あき</sup>なけきば。子<sup>こ</sup>孫<sup>そん</sup>よおきたる  
色<sup>いろ</sup>そこのいなりとぬり。

八月十五秋。

秋風<sup>あきかぜ</sup>よいとふあけゆく月<sup>つき</sup>影<sup>かげ</sup>をたらしぬう<sup>う</sup>く<sup>く</sup>を阿<sup>あ</sup>ま乃<sup>の</sup>川<sup>がは</sup>きり

○ふけるもをいき月<sup>つき</sup>よいとを霧<sup>きり</sup>をいとよん<sup>ん</sup>なると抄<sup>しり</sup>よ<sup>よ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>  
ぬくならん<sup>ん</sup>の。秋<sup>あき</sup>ま<sup>ま</sup>ども。初<sup>はつ</sup>句<sup>ご</sup>秋<sup>あき</sup>風<sup>かぜ</sup>よといふこと。少<sup>す</sup>く<sup>く</sup>種<sup>たね</sup>な<sup>な</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>さ<sup>さ</sup>ら  
なり。師<sup>し</sup>云<sup>い</sup>。ぬり<sup>り</sup>た<sup>た</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>も。初<sup>はつ</sup>句<sup>ご</sup>を<sup>を</sup>ば。三<sup>さん</sup>句<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>へ<sup>へ</sup>に  
け<sup>け</sup>。秋<sup>あき</sup>風<sup>かぜ</sup>よ霧<sup>きり</sup>を<sup>を</sup>拂<sup>はら</sup>は<sup>は</sup>せ<sup>せ</sup>。ま<sup>ま</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>な<sup>な</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>な<sup>な</sup>らん<sup>ん</sup>う<sup>う</sup>とい<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>を  
たり。 産<sup>う</sup>麻<sup>ま</sup>呂<sup>ろ</sup>も。月<sup>つき</sup>下<sup>した</sup>に<sup>に</sup>落<sup>お</sup>ち<sup>ち</sup>霧<sup>きり</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>風<sup>かぜ</sup>よ霧<sup>きり</sup>ら<sup>ら</sup>あ<sup>あ</sup>び<sup>ひ</sup>け<sup>け</sup>を<sup>を</sup>月<sup>つき</sup>も  
西<sup>にし</sup>へ<sup>へ</sup>い<sup>い</sup>そ<sup>そ</sup>く<sup>く</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>に<sup>に</sup>又<sup>また</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>月<sup>つき</sup>を<sup>を</sup>惜<sup>お</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ<sup>ふ</sup>情<sup>なさけ</sup>より。月<sup>つき</sup>の<sup>の</sup>風<sup>かぜ</sup>よさ<sup>さ</sup>を  
も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>小<sup>こ</sup>虫<sup>むし</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>。秋<sup>あき</sup>風<sup>かぜ</sup>よ又<sup>また</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>ると<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>らん<sup>ん</sup>う<sup>う</sup>と  
い<sup>い</sup>へ<sup>へ</sup>。は<sup>は</sup>説<sup>せ</sup>や<sup>や</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ん<sup>ん</sup>の<sup>の</sup>い<sup>い</sup>らん。

延喜寺時秋。あき<sup>あき</sup>よ<sup>よ</sup>き<sup>き</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>ける。

雲々

女郎<sup>ぢやうらう</sup>もあ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>秋<sup>あき</sup>の<sup>の</sup>む<sup>む</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>燈<sup>あかり</sup>を<sup>を</sup>つ<sup>つ</sup>き<sup>き</sup>より<sup>より</sup>も<sup>も</sup>程<sup>ほど</sup>む<sup>む</sup>ら<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>。

○武蔵野ハ家のゆくりあてたもむつまきを女とりよ名の花  
の笑ひあひてある杖を例よりもむつまき思ふもかちと  
上<sup>新</sup>古今<sup>新</sup>の一時やゆきよむさ一時の暮ハまねぐら阿なれとぞ  
又ふはあよりおろして紫の一時やゆきよむさ又むつまきのゆの  
まともよむす一契仲は師も縣居大人などもいされたり。

人よつのはけり。

愚賢王

杖を乃ちあききりまき一女郎をまき人やあんと思へど  
○<sup>新</sup>勢のまねもふまきする人のゆくりのと敷もくもまねを  
まねのまねもいふまき一むつまきし二句を切て三句以下を  
てんてん一かくてまねのまねのおおぬるまねの女房などの人け  
まねまねをまねまねをまねまねをまねまねをまねまねを

おぢつりなうらぬおよりのみなるなどおぢつりなり  
な。

歌しらえ

よし人不知

をみおべ一むつまきむつまきむつまきむつまきむつまきむつまき  
○松むしの鳴ハ誰か他はむつまき人ありてなくあつんを女房まき  
の我が手にやと思ひまきむつまきむつまきむつまきむつまきむつまき  
あつんと見ゆるがかきき誰をむつまきのむつまきむつまきむつまき  
ふなり。

女郎花むつまきむつまきむつまきむつまきむつまきむつまき  
○女郎花をばむつまきむつまきむつまきむつまきむつまきむつまき  
まきむつまきむつまきむつまきむつまきむつまきむつまきむつまき

をみ奈備く花のさかりは秋風のゆく夕暮を催ふかゝる藤  
○さうりなる葉の赤をせぬべくふますさよ秋の夕風の抱擁しきけ  
しきをなが免出ししる者のさるなりし。 来向ハ、信よりかきり  
合せいうよのせんと、花のうへを添く思ひ入まゝるごとす也。

貫之

白く乃衣かきしき女師をさける時ふぞこよひ縁りけり  
○万葉八喜の時ふすれつとあし我ぞ時をなつらし一秋寐  
小けるなまの敷ゆ女師をのふりけりしはよ一秋旅をし  
ふりよとなり。續後拾遺上女師をよるなりしは母より秋葉の  
枕もくをんむかりふ。

名子—おへぞあひてたのまん女師をよる乃んれ秋葉の  
よるは又一本  
人の

○女と名子つきてあまが。長中一平の方子をも、女と名子つきてあなが  
ちほもたのまん秋さく花なれど、葉のんの厭くとつふりうく何  
事ともとなり。 後く厭うる事あらんハ、憂くありとも。そま  
でのりをば思ひもまうじば、まづうちつけおれまんと、いとあま  
きすねくしきさ方子とるなり。 秋を人の厭くさふりる事ハ  
論なり。

みつひ

まうねむさし似る家物うな女師を秋より外より何よとねまな  
○古今上秋秋なうであらうことうらねを思ひしあ方秋のまうおひ  
ぬそのゆき。

よる人あはは





きりよもぬり。女帝をささかりたるは、我を老ゆくが悔しといふ  
みて、二句と四句とくけ合て、深きあやれをこゑするまなり。本朝文  
粹第一源順朝臣の詠女郎花詩、花色如薔粟俗呼為女郎、團名戲款契  
借老ラズ惡イニヤ衰老首似霜。はあ躬恒集ハ河虫をこたへしハの多かる  
あまてとありて、新の二句おほゆる時をとあまども、は集の方ま  
さるべし。

すまひのえりて、あまのさかき、女帝花を折て、あつよりの  
みとれ、あまのさかきとて。

三条右大臣

○すまひを相撲なり。かゝるあまのさかき、還郷なり。相撲の節

會ハ七月子行をくまなり。毒くハ、類聚國史第七十三歳時  
部の

四 西官記七月あまの江次第巻などおんく、今ハ要をほと

いづいそんとし、公事根源子、是を諸公の供侍人を召集て、

七月子相撲節といひて、天子の御覽するなり。先づ十六七

日の間ハ召侍あり、上卿勅を奉て、左右の次將子相撲あるべ

きよしを免し侍らる。左右の近衛方をまけて、あまへ使をく

だして相撲をめ、是を万葉にも、ことり使とすなり。廿六日

あ、大月ハ廿六日、小月ハ廿五日、内取といひたり。内取ハナラシ

ぬ、左ハ左ドチ、右ハ右ドチ取ルヨシナリ。主上、仁壽殿ハ出侍なり。左右の相撲人

犢鼻の上よかきぬ。江次第ハ、左加まをまて、一こお撲を

取て勝負あり。廿八日、江次第云、大月ハ廿八日、小召合あり。召合

ハ、左右相撲相合也。江次第ニ有、天皇南殿ハ出侍なり。玉卿上、大將相撲

の奏をとり、十七番とて録の方乱あり。まゝ、廿九日、癸丑拔  
出<sup>テ</sup>とて、相撲をすぐりて、勝遊せしむなり。神龜三年に、乙未  
免て、徳正よりめし、のちせしむるまゝと見ゆ。これにて一  
わたり、らゆべし。かへり、あやむと、教多く、勝する方の左  
く、播て、大將、在多く、かて、大將の里亭にて、あ  
るなり。大將、後領、あて、を、行、ま、ま、なり。大將の  
里亭にて、相撲人、酒を、給、親王、公、以、殿上人を、招、酒宴  
あ、を、い、なり。こゝに、其、方、中將、少、お、より、初、お、撲人を  
管、せ、し、し、親王、公、卿、など、を、ニカ垣下の、座、つ、き、あ、し、な  
り。垣下の、相、伴、の、ま、なり。三、条、右、大臣、定、方、公、左、近、衛、大將、を、兼  
あ、る、り、公、卿、補、任、し、し、れ、其、時、の、り、あ、教、養、親王、も、  
垣下の、座、小、若、あ、る、な、り。一、正、明、云、還、饗、ハ、カザシ録、方、の、従、ひ、の

ん、ま、なり。かへり、と、ハ、朝廷、より、里、郎、へ、ゆ、ま、い、ハ  
管、養、の、り、なり。源、氏、物、語、常、夏、巻、下、競、馬、の、還、養、の、り、也、か、ま、  
あ、夕、露、君、中將、な、れ、ま、す、れ、な、る、例、なり。ま、く、ハ、大將、の、り、なり。  
か、ざ、り、お、り、ハ、此、時、ハ、え、し、ぬ、儀、なり。ま、づ、り、し、き、例、な、る、  
し、か、ざ、り、の、り、や、り、ハ、冠、の、中、子、お、ま、と、に、上、緒、と、い、ふ、紐、あり。  
今、ハ、漆、也、  
ゆ、り、付、り、し、り、。それ、を、ま、ね、ら、し、て、其、旨、へ、ま、ま、り、なり、と、い、ま、れ、  
る、。

を、ま、ね、り、ハ花、の、名、な、る、ぬ、ま、の、な、る、ハ、何、か、ま、お、か、ざ、り、に、ま、せ、ん  
と、ハま、る、お、の、む、す、め、に、せ、う、ま、か、よ、ば、り、傳、々、を、女、の、り、あ、か  
る、り、ハな、ど、い、ひ、て、ゆ、さ、ぬ、あ、ひ、ぶ、な、ん、傳、々、。

○は、花、女、と、い、ふ、名、な、る、べ、き、い、ま、を、か、君、が、頭、挿、カザシあ、も、す、べ、き、あ、ま、あ、ひ

たる花ゆゑ小君が加ざりにするなりと云て、奉むらむす先をか  
らひあゝるすをハ、ほの知らなく、ゆゑにまらざりしかども、今日の  
ついで小ゆゑにまらざるといふ言なきべし。け奇抄中も此言とせ  
呈。然まども又、瓶麻呂が異なる考もありて、其方もすてがら記さ  
らすれど、いふがあらん、いまだよくも思ひささるべし。然るに  
考て、追考ふ記さへし。

法皇、伊勢の家の女郎花をゆゑれば、まををすて。

○法皇ハ宇多帝にて、所寛平法皇なり。け御女、いさかひ小  
へきりあまきども、下に奇のすを備へり。其言も合せていへし。

枇杷左大臣

女郎花をりせん枝のすゝとふさふさ秋伊勢集を思ひ出や勢し

○け奇、何句家集は杖をとある方まさるべし。されどこそ備あること  
なれど、委くハ下よりべし。一首は、さハ、色き院の法門の先  
あつにやうて、女郎花をまらさうとすく、女郎花ハ、女女を、花花  
なすに、なごしよべき花なれば、さたは法門より入来て、佛伽あも  
免されたるをりけすを、思ひ出されたるかと云て、今小をりしと  
とふま、もとのすを思ひ出さるあゝんと、つよをみく免あへり  
守也。二三句、をりせん枝のすゝとふさとある句ハ、をりふしと  
小とをさすといひつけあゝるなれど、け伊勢抄ハ、そとめ仲平  
公枇杷左大臣と相いされたるを、らあもあゝで絶する後、小帝になら  
まきて、ほ子をまらさうとすく、れど、其心をみく免て、かくまひひやり  
あゝるなり。程委くハ、次の奇よりを引合せて見んべし。



へまことなうなくふとあり。さや一秋をいさや一時をといまんの  
 めくかの宮づりへ一をなうそれまゝ此のゆをさすそのさす  
 るなれど末句のせしとあるふよかかなん。せしをいさやなれど時  
 の花をまゝさうふ。されようさねふあり。は奇。二三句ふ今もを  
 りをさひおしるさなるさうハ。ちまさうなる。まや一どとふま  
 さい出。さやとまさふくさあるを。奇の表の  
 こと。甚ふくさるさよを。一つふ合せとあんとするゆゑ。まだ  
 らもしくなうて。一首のさやかなうびなるさ方なり。すててつ  
 色の奇にもあまふく免るさハふく免るさよとて。混雑さるや  
 うふ。一首の表をい表せとてべきゆなり。かくてはさけ集を初免  
 上始ゆも。女師玉さうける枝のゆ。どとふ。是中家集も。君と有て。  
 秋と何るま。たは流布の家集のなれど。君とあるハ誤なりんとま

つひがけきど。君と何るを周ふとも。さハなや。秋とあるよいつを  
 ともまさん。さづり人のさうをささうとまさん。方集もく思もさ  
 ぎ。と。奇をばらさこめとけり。  
 此他者。ちのたかこも。伊勢家集云。いつまの時時ふありけん。大  
 ちやさ。玉ハ又程ノ一也。とすゆ。清つありふ。大和よおやある  
 人。即伊勢御。自身ノ事。さづりひなり。親いとかなうして。男などもあまを  
 ざうけるを。清島西のせうと。批。左大臣。仲平公也。年ごらいついさうのあを。  
 ちや。ハさうにきめざうける子。いあ。ありけん。おやいあ。いさ  
 んとなげまけるを。年ごらへふかれがすつけてさう。されどすくせ  
 こそありけえとて。ことよいまざうけり。たわらうき人ハたのめが  
 たきものぞといひる。ほどふ。時のおわらうち君のむこおとら

きふなり。甚をうにぞ。おやもされをよとひひられど。女もづりいと  
あしほどふ。け男の件より人まうま。コレヨリ。大和へ行ク事。三編  
初瀬ニ指タルコ。のふいふ小結足ん。ま。の奇。  
トナドアリテ。か。不経ふつかり。万つう。一。西。侍島。不。チ。ナ。リ。より。ま。や  
のぢ。せよとおおせぬけれど。ま。や。の。ぼ。う。ぬ。へ。も。と。う。り。宮。づ  
かへをこそしぬくとおひし加と。思をせてりま。ま。や。の。ぼ。う。ぬ。へ  
件ナル人。トナドノ。詞ト聞ユ。思をせてト云コト。聞トリ。雅。ヒ。写。誤。ナ  
ドアルニ。又。本ニモ。同。シ。ヤ。ウ。ニ。アル。ニ。サ。テ。此。家。集。ヲ。引。タ。ル。ハ。吳  
本ト。五。ニ。見。合。セ。テ。正。シ。カ。ル。ベ。ク。又。ユ。ル。方。ヲ。引。ケ。リ。前  
後ノ。卷。ノ。二。引。タ。ル。モ。三。十。六。人。家。集。ト。云。物。ナ。ル。ハ。皆。然。リ。志。ぬ。こ  
こ。ち。す。し。し。よ。な。き。思。ふ。ち。や。ま。思。ひ。か。け。な。ま。と。ひ。て。あ。け。て  
ノ。ア。リ。シ。翌。日。う。ち。ま。あ。り。つ。か。あ。り。の。あ。ひ。ぶ。ふ。け。男。も。足。か。さ。し。て。  
ノ。事。ナ。ル。ベ。シ。な。ま。あ。り。つ。か。あ。り。の。あ。ひ。ぶ。ふ。け。男。も。足。か。さ。し。て。  
仲平。あ。ま。れ。よ。い。ど。色。を。足。お。は。す。や。ど。ふ。け。男。足。見。なる。男。あり。  
公。今。ハ。あ。の。人。仲平。公。ま。よ。あ。も。と。は。い。な。ふ。う。た。の。と。あ。ま。ふ。  
時平。今。ハ。あ。の。人。仲平。公。ま。よ。あ。も。と。は。い。な。ふ。う。た。の。と。あ。ま。ふ。

我をおもてち。誤。カ。本。六。足。ト。リなまよいど。みだかりハ足つも。さうふあを  
でありち。同。ニ。時。平。公。ト。誤。着。又。他。ノ。男。ノ。哥。ナ。ド。モ。アリ。け女を。これかまよいど  
まうば。宮づり人をのこし。ありたる。小。時。の。侍。門。亭。子。ノ。事。め。つ  
のひあひを。やうぞけ。か。ぬ。入。の。こ。と。を。ま。か。ざ。り。を。と。ふ。ふ  
毛おやなど。思ひまうける。うち。お。ま。ら。み。あ。け。り。さ。て。男。皇。子。を  
うもまを。我おやまづ。うもま。い。と。う。れ。し。と。思。ひ。を。つ。か。り。ま。り  
ま。し。侍。島。不。也。后。七。条。后。ト。用。ユ。ル。也。小。な。り。あ。ひ。あ。け。り。ま。と。あ。り。て。や。未  
承。け。答。も。出。ず。け。家。集。よ。足。し。る。お。ま。ぶ。ま。を。も。よ。く。味。ひ。見。て  
さ。と。ま。へ。ま。な。り。

後撰和歌集卷第六新抄



